珍しい光陰 — 日本での研修 The Precious Time : My Study Experience in Japan

王 梅芳*

中日友好病院図書館

(現：東京慈恵会医科大学医学情報センター見学生)

私は中国北京市の中日友好病院の図書館員でございます。(特)国際協力事業団(JICA)の中日友好病院プロジェクト研修員として、今年3月1日に東京に来て日本語の研修を受け、4月11日から医学図書館の現代的な管理を勉強するために、東京慈恵会医科大学医学情報センターで研修を受けています。

私は1982年夏に中国の武漢大学の図書館情報学部を卒業した後、派遣された北京市の中央教育行政学院の図書館に勤めておりました。1983年12月中日友好病院が図書館員を募集した時に応募し、転職しました。それが医学の知識と接触した最初で、徐々に医学に関して興味を持つようになってきています。医学図書館は多様な情報サービス活動が展開されており、世界の専門図書館の中で最も進んでいますので、私は医学図書館員の職に誇りを持っています。

中日友好病院は、JICAの援助で中日両国政府の協力によって1984年10月に開院した現代的な総合病院です。現在の全スタッフは2,700名、建築面積は83,000㎡、建物は13棟あります。ベット数は1,300床で、その中300床がリハビリテーション用です。

病院は、医療、臨床医学研究所、衛生学校の3つの部門に分かれております。医療部門は、臨床分科が37あり、現代の科学的手段で患者を検査し、診断します。患者の病状によっては、西洋医学か、中国伝統医学か、あるいは両方の結合などの方法で患者を治療します。

臨床医学研究所には9つの研究室があり、疑難病症に対して病理、病因、治療の方法などを研究しています。現在の研究重点は癌、心血管病、脳血管病、肝・

腎臓器疾病、老年性病、免疫疾病などで、中国伝統医学と西洋医学とを結合して予防と治療法を研究しています。衛生学校は、看護、臨床検査、診療記録管理などの病院の中級医学技術員の教育を行っている所です。

病院は昨年から医学修士生と博士生を募集しています。病院の特長は、西洋医学と中国伝統医学を結合して、治療とか、臨床医学研究とか、医学教育などを運営することにあります。

そして私が勤務している図書館は、普通の病院図書室と少々違って、臨床治療、医学研究、医学教育に関する情報サービスを提供しています。今、図書館職員は全員で20名です。しかし病院の歴史が短く4年しかありません。図書館には医学蔵書もまだ少なく、病院内の医師や研究者の医学情報への強いニーズに対して十分には対応できていません。幸い相互貸借が良くできるようになっており、中国医学科学院図書館(中国における医学資料収蔵の中心的存在)にお世話になっています。

病院のリーダー達は、医師や研究者が良い医学図書館サービス、良い情報サービスを望んでいることを良く理解していて、近い将来には図書館とコンピュータ室を中心とした病院の医学情報センターを設立する予定になっています。そのために私はJICAの援助を

* Mei Fang WANG : China-Japan Friendship Hospital Library

受け、病院から派遣され日本へ勉強に来たのです。

私は来る6ヶ月位前から日本語を勉強しました。そして日本へ来てその後5週間日本語の訓練をさせてもらいましたが、勉強した時間が短かく、日本語での会話が良くできないので少々心配でした。しかし、幸い慈恵医大医学情報センターの皆様はとても親切にお世話をしてくれ、私は心から感謝しています。

既にご存知のように、70～80年代からコンピュータとテレ・コミュニケーションの技術が急速度で発達していることに影響されて、図書館情報学の理論と実践はかなり変化しております。経済先進国として米国と日本は中国よりも図書館の業務にコンピュータを応用することが進んでいます。従って、日本で色々なことを勉強したいのですが研修期間が4ヶ月半しかありません。「何を勉強したいのですか」と私の研修指導の裏田先生がお尋ねになり、「一番勉強したいのはコンピュータで医学図書館の業務を処理することです」と私は答えました。それから私の研修スケジュールを詳しく作成してもらいました。まず4週間で医学情報センターの各セクションで実習、その後はコンピュータについて基本から勉強したり、実習したりしております。今は外国書目録の入力と検索のミニチュア・データベース作りの指導を受けております。

なお、週に平均1回、優れた図書館や情報サービス機関を見学させてもらっております。既に、慶応義塾大学医学情報センター、国際医学情報センター、東京大学医学図書館とか、丸善のUTLASセンター、紀伊国屋書店でのOCLCのデモンストレーション、国立国会図書館、日本科学技術情報センター、学術情報センター、東京女子医科大学図書館、東邦大学医学部図書館へ行きました。今後は、自治医科大学図書館、大阪大学附属図書館中之島分館、国立民族学博物館、京都大学医学図書館、奈良県立医科大学附属図書館への見学が予定されています。

それらの図書館情報サービス機関の皆様はとても親

切に案内をしてくれました。私はそこでの詳しい説明と実際に行われている日本国内のオンライン検索とか、国際オンライン検索とか、またパーソナル・コンピュータでのデータベース編成と検索システムを操作させていただき、専門視野が広がりました。

中国にいた時には、文献によってのみ、国際オンライン検索、CD-ROM、機械翻訳などに関して知っているだけで実物を見てはおりませんでした。今回は国立国会図書館で80～87年の50万件の記録を入力したCD-ROM(J-BISC)からの検索や、紀伊国屋書店での今年のMEDLINEのCD-ROMからの検索、そして日本科学技術情報センターで研究開発中の機械翻訳システムを実際に見て心から幸せを感じました。

私はお世話をいただいた見学先の皆様に、この誌上を借りて衷心からのお礼を申し上げます。

日本に来てから数多くの機会に接しました。最も深い印象を残したのは、日本の図書館情報学の学術研究が活発に行われていて色々な勉強会があることです。活発な学術研究活動は図書館員にとってさらに良い知識を得るチャンスです。図書館員のスペシャルティ・コンペテンスに対してプラスになりますし、図書館員の継続教育の大切な一部分だと思います。6月25～26日に私は幸いに第5回図書館情報サービス研究大会に出席することができました。日本の同僚達の積極的な学術探究精神に感心させられて、羨ましい気持ちになったのです。

先述しましたが、8月中旬に関西地方の優れた図書館へ見学に行く予定ですが、その時には関西の同僚達に面会をかけることになりますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

私は今回初めて外国で勉強しています。この6ヶ月間珍しい光陰であり、日本での多様な経験を一生忘れないでありましょう。慈恵医大医学情報センターのセンター長 望月幸夫教授、裏田和夫助教授をはじめ、センターの皆様は大変お世話になりましたことを深く感謝申し上げます。